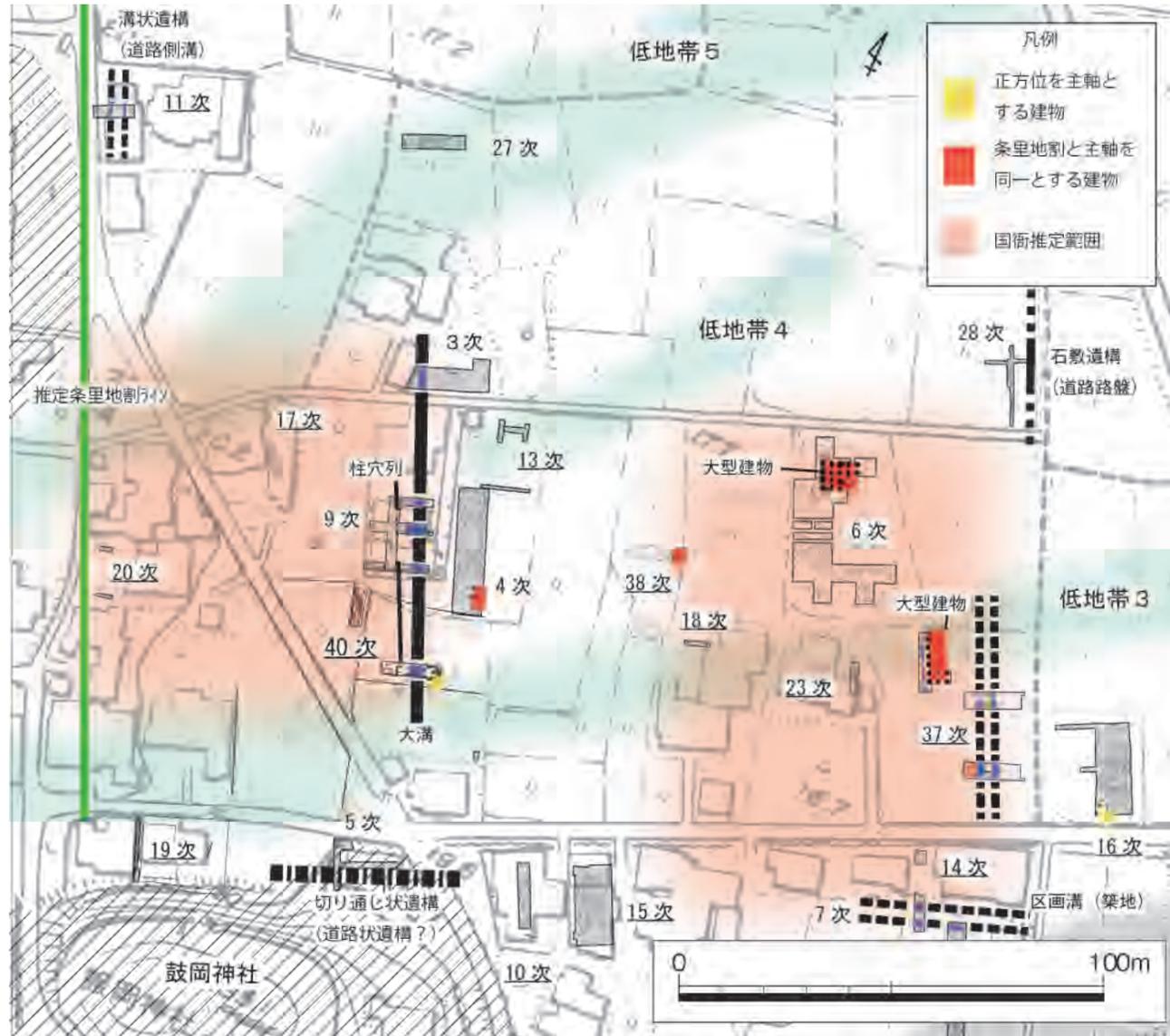


令和5年1月7日
香川県埋蔵文化財センター

3. おわりに

今回の調査で確認したSB01は、史跡指定地で確認された前身官衙の大型建物群と同じ正方位主軸を持っています。今回の調査地の東側でも同一の主軸を持つ溝や柱穴が若干確認されていることも合わせ、指定地北側にも前身官衙関連施設が及ぶことを明らかにすることができました。

また、SD01は長期に維持されたことがわかり、国衙施設を囲む区画溝の機能を持つことが想定出来ます。今回の調査地の東側で実施された6次調査や37次調査でも大型建物が確認され、国衙（倉院か）が想定されています。今回の調査では大溝の西側の区画の内部施設はの存在は不明なままですが、溝と柵で区画された国衙の存在が想定されており、その範囲と内容について今後も調査・検討を続けていく必要があります。



▲ 40次調査地点と周辺の調査状況

坂出市都市計画図 (1/2500) を縮小し、一部加筆して掲載

『令和4年度 讃岐国府跡40次調査 現地説明会資料』

令和5年1月7日

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷字5001-4

TEL:0877-48-2191 FAX:0877-48-3249

Email: maibun@pref.kagawa.lg.jp https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/

1. 讃岐国府とは

国府は、古代に置かれた66ヶ国2島を統治した役所です。国府には、儀式や政治を行う中心施設である政庁（国庁）や、実務のための施設（国衙）、国府の長である国司の館等の施設によって構成されます。讃岐国府は、坂出市府中町に所在していました。

讃岐国府は、9世紀には実務型国司（良吏）が多く赴任し、地方政治の改革を進めました。菅原道真はその代表的な人物です。また、中央の政治動向とも密接にかかわり、崇徳上皇（1164没）が晩年を過ごしたゆかりの地として知られています。

讃岐国府のそばには南海道の河内（うまや）駅家もあったとされ、また国府の横を流れる綾川は、河口部の国府津にもつながっています。このように水陸の交通の要衝であったといえます。

香川県埋蔵文化財センターでは、讃岐国府跡の広がりや確認や、主要施設推定地の実態の解明を目的とする発掘調査を、平成21年度から行っています。

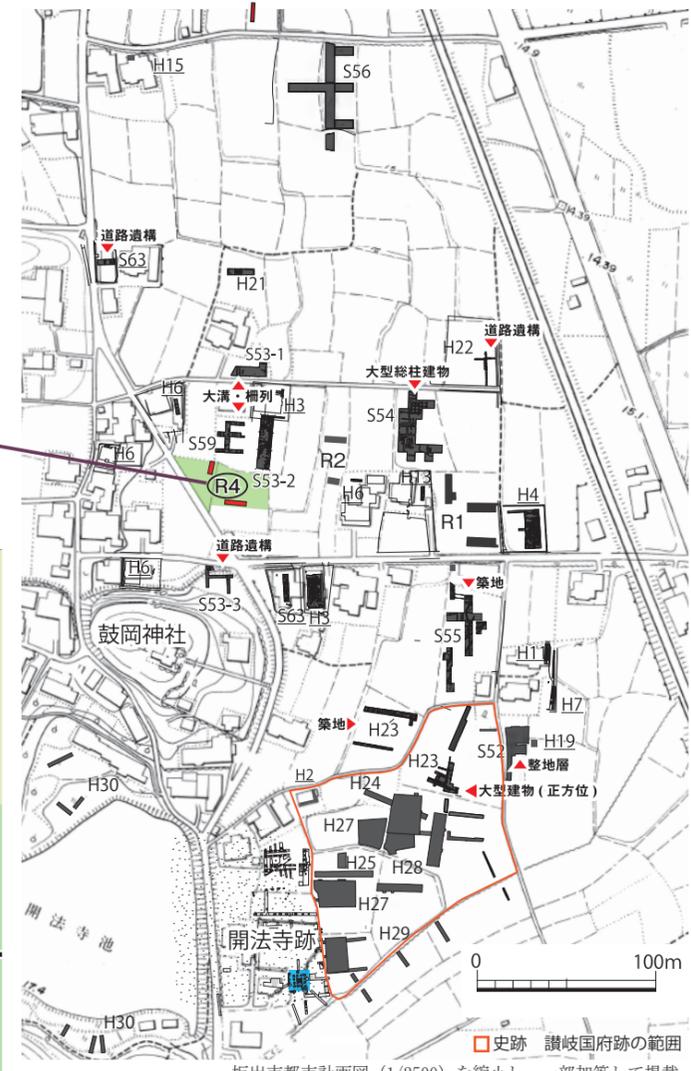
今回の調査地点

今回の調査地点は、昭和53年度（3次）や昭和59年度（9次）の調査で古代の大溝や柱穴列が見つかっているエリアの南側にあたります。

この大溝や柱穴列は国衙関連施設を区画するものと考えられており、その内容を確認することを調査の目的としています。



▲ 讃岐国府周辺の歴史的環境



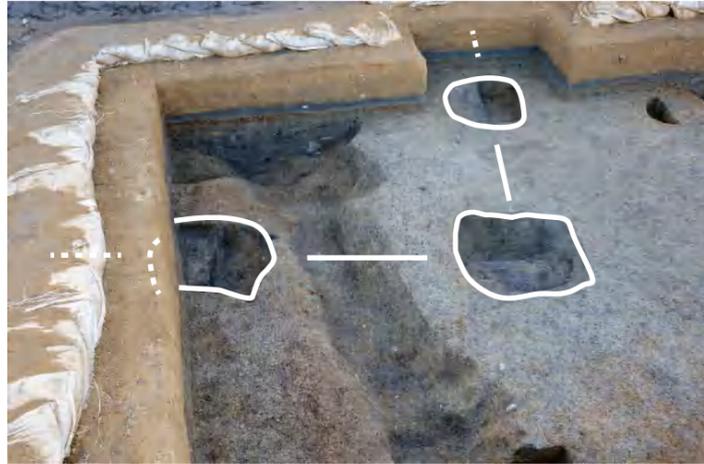
▲ 讃岐国府跡における発掘調査地点と代表的な検出遺構

2. 讃岐国府跡 40 次調査の成果

調査は 2 本のトレンチを掘削して行いました。その結果、古代～近世の柱穴や溝、井戸などの遺構を確認しました。調査の主な成果は以下のとおりです。

① 讃岐国府出現前夜の遺構

1 トレンチ南東隅で確認できた SP04・05・20 の 3 つの柱穴は、埋土・規模の状況から同時期のもので、位置関係からほぼ正方位(真北)を意識した建物 SB01 を構築したものと考えられます。時期の分かる出土遺物が無く、帰属時期は不明ですが、当調査地の南東約 200m にある史跡指定地で確認された、7 世紀後葉～8 世紀初頭にかけて造営された前身官衙である大型建物群が正方位主軸を採ることから、この頃の遺構であると想定できます。



掘立柱建物 SB01 (北から)

なお、残りの柱穴はそれぞれ別の建物に伴うと考えられますが、組み合う柱穴がありません。SP06 は正方位を指向するように見えるため、SB01 に近い時期と考えられます。

② 讃岐国府跡の遺構 1

大溝と柱穴を確認しました。

大溝 SD01 は、3 次及び 9 次調査で確認された大溝の延長上に位置します。この溝の埋土には、流水の痕跡が乏しいことや人為的な埋め戻しの痕跡があることが確認できおり、その状況から、導水施設ではなく、空堀状のものであったと推定されています。



大溝 SD01 (2 期) の底部と土層

今回の調査でも同様の状況でしたが、開削と埋め戻しが少なくとも 3 回行われ、溝の機能した時期を 3 期に細分できることが新たに分かりました。過去の調査時のものも含めた出土遺物の時期から概ね 8 世紀前葉には開削され、10 世紀代には廃絶されたと考えられます。

当初、復元された周辺地形と大溝と柱穴列の位置関係から、この大溝の西側に 1 辺約 50m 程度の溝で区画された施設の存在を想定していましたが、今回の調査成果から、より大きな区画施設を考える必要が出てきました。大溝の西側約 80m 付近に条里地割の坪界が想定されること、その東側には 11 次調査で道路側溝とみられる 2 条の平行溝が確認されていること、北側・南側共に想定される低地帯に挟まれた微高地の南北幅が約 80m 程度であることなどから、その規模は、少なくとも 1 辺が最大約 80m となると予測されます。

また、この大溝は約 200 年間の間に数回の埋立と掘り直しが行われ、改修しながら同じ位置にあり続けることから、この区画に強いこだわりがあったことが伺え、重要な施設の存在を想定できます。

③ 讃岐国府跡の遺構 2

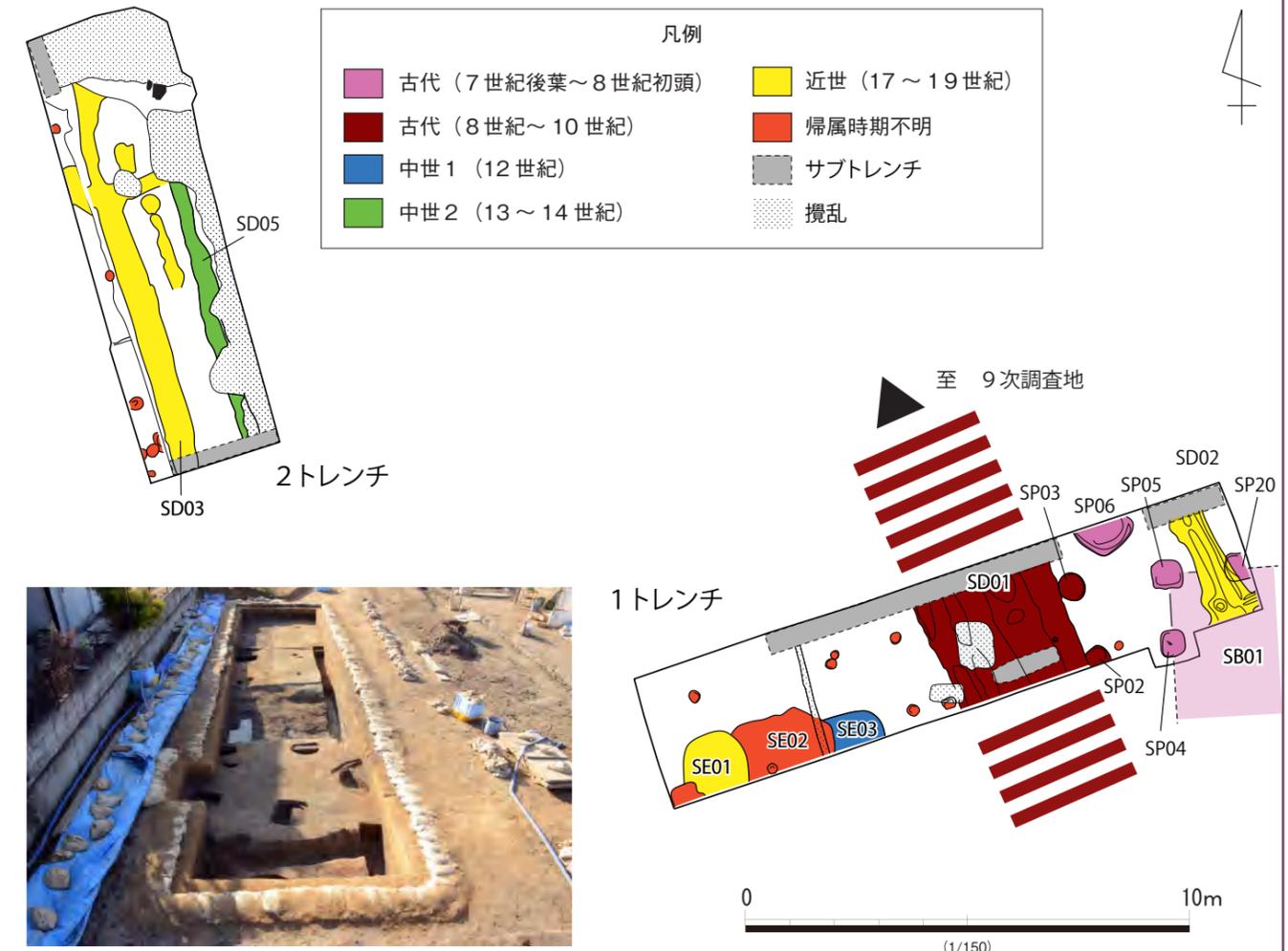
井戸と溝を確認しました。

井戸 SE03 は 1 トレンチで確認できました。埋没状況から廃絶時に埋められたと考えられ、上部は周辺の削平と相まって著しく破損しています。残存する下部には、横板で方形の井側が生まれ、下端には曲げ物が 1 段井筒として設置されています。出土遺物から 12 世紀後半には埋められたものと考えています。この頃は讃岐国府の終盤にあたり、留守所で在庁官人と讃岐国内の伝統的な豪族により政務が執り行われていました。讃岐国府域ではこれまでに多数の小型の柱穴からなる建物群と井戸で構成される屋敷地が複数確認されています。これらの屋敷地は豪族の宿营地として考えられています。今回の調査地ではこの時期の柱穴と確実に判断しうるものは確認できていませんが、削平に伴い残存状況が不良な帰属時期不明の柱穴がそれに相当する可能性があり、これをもとに屋敷地の一角であったと考えています。



井戸内の井側と井筒

2 トレンチで確認した溝 SD05 は、出土遺物から 13～14 世紀のものと考えています。この頃は国府の機能が衰退して急速に耕地化が進む時期で、耕地化に伴い開削されたものと考えられます。



讃岐国府跡 40 次調査 平面図及び 1 トレンチ全景写真 (東から)